

コリント人への手紙第二

コリント人への手紙について

いま私たちが見ている聖書(正典:公式に信者が従うべき基準として確立されている文書)には、パウロがコリントに送った手紙は、第一と第二の2巻です。しかし、コリント人の手紙第一と第二の内容を見ると、手紙第一の前に1つ、第二の前に1つ、手紙を書いていることが分かります。

I コリント 5:9

私は前にあなたがたに送った手紙で、不品行な者たちと交際しないようにと書きました。

「送った手紙」と過去形で書いてあるので、手紙第一を送る前に1つ書いたということでしょう。

II コリント 2:3-4

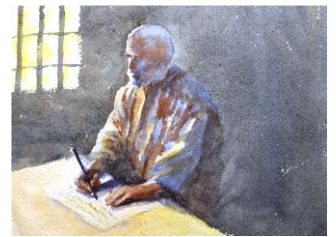
3 あのような手紙を書いたのは、私が行くときには、私に喜びを与えてくれるはずの人たちから悲しみを与えられたくないからでした。それは、私の喜びがあなたがたすべての喜びであることを、あなたがたすべてについて確信しているからです。

4 私は大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらに、あなたがたに手紙を書きました。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、私^{わたし}があなたがたに対して抱いている、あふれるばかりの愛を知っていただきたいからでした。

手紙第二にも、「書いた」「書きました」と過去形で言ってます。これも手紙第二を書く前に、1つ手紙を送っているということでしょう。

しかし、いまは第一第二以外の2つの手紙は残っていません。それは、必要がないので神様が残されていないということでしょう。

新約聖書で、パウロの書簡(手紙)は、13巻か14巻だと言われています。その書簡の中で、いちばん長い手紙が「コリント人への手紙第一、第二」です。コリント人への手紙第一は16章あり、第二は13章あります。いま私たちが見ているコリント人への手紙以外に、まだ他にコリント人への手紙があったということは、それほど、内容があるということです。すべてが含まれていたなら、新約聖書の中で一番長い内容になっていたでしょう。



それは、使徒パウロの**コリントの人々に対する愛が、それほど大きかった**ということです。上で見たIIコリント2:4の最後にも「それは、あなたがたを悲しませるためではなく、私^{わたし}があなたがたに対して抱いている、あふれるばかりの愛を知っていただきたいからでした。」あなたがたに、愛の手紙をこのように長く書いているということです。

先週の学院福音化の4課で語ったように、神様の大きなあふれるばかりの愛が、パウロを通して他の人たちに伝えられているということです。「神の愛」と「隣人の愛」は、同じことだと見ました。神様を愛する結果が隣人を愛することで現れ、隣人を愛する結果が神様を愛することとして現れるのです。(先月のメッセージを参考にしてください)

フォーラムの主題：「**苦し**みと**祈**り」

II コリント 1:11

あなたがたも祈りによって、私^{わたし}たちを助けて協^{きょうりよく}力^{りよく}してくださるでしょう。それは、多く^{おほ}の人々^{ひとびと}の祈^{いの}りにより私^{わたし}たちに与^{あた}えられた恵^{めぐ}みについて、多く^{おほ}の人々^{ひとびと}が感謝^{かんしゃ}をささげるようになるためです。



1. **苦し**み（**苦**難）について

パウロの働^{はたら}きを話^{はな}すときに、必^{かなら}ず出^でて来^くるのが「**苦し**み（**苦**難）」です。

II コリ 1:8-9

8 兄弟^{きょうだい}たちよ。私^{わたし}たちがアジヤで会^あった苦し^{くる}みについて、ぜ^しひ知^しっておいてください。私^{わたし}たちは、非^{ひじょう}常に激^げしい、耐^たえられないほどの庄^{あつぱく}迫^うを受け、ついにいのちさえも危^{あやう}くなり、

9 ほんとうに、自分^{じぶん}の心^{こころ}の中^{なか}で死^しを覚^{かくご}悟^ごしました。これは、もはや自分^{じぶん}自身^{じしん}を頼^{たの}まず、死^し者^{しや}をよみがえらせてくださる神^{かみ}により頼^{たの}む者^{もの}となるためでした。

まるで、神^{かみ}様が殺^{ころ}すことを決^{けつだん}断^{だん}されたかのようで、生^いきる希^{きぼう}望^{ぼう}さえなくなったと言^いっています。ど^いんな苦し^{くる}みを受^うけたのか、その内容^{ないよう}はII コリント 11:23-28 にあります。

II コリント 11:23-28

23 彼^{かれ}らはキリストのしもべですか。私^{わたし}は狂^{きやうき}気^きしたように言^いいますが、私^{わたし}は彼^{かれ}ら以上^{いじょう}にそうなのです。私^{わたし}の勞^{ろう}苦^くは彼^{かれ}らよりも多^{おほ}く、牢^{ろう}に入^いれられたことも多^{おほ}く、また、むち打^うたれたことは数^{かず}えきれず、死^しに直^{ちよくん}面^{めん}したこともしばしばでした。

24 ユダヤ人^{じん}から三^{さん}十^{じゅう}九^{きゅう}のむちを受^うけたことが五^ご度^ど、

25 むちで打^うたれたことが三^{さん}度^ど、石^{いし}で打^うたれたことが一^{いち}度^ど、難^{なん}船^{せん}したことが三^{さん}度^どあり、一^{いち}昼^{ちゅう}夜^や、海^{かい}上^{じょう}を漂^たったこともあります。

26 幾^{いく}度も旅^{たび}をし、川^{かわ}の難^{なん}、盗^{とう}賊^{ぞく}の難^{なん}、同^{どう}国民^{こくみん}から受^うける難^{なん}、異^い邦^{ぼう}人^{じん}から受^うける難^{なん}、都^と市^しの難^{なん}、荒^あ野^やの難^{なん}、海^{かい}上^{じょう}の難^{なん}、にせ兄^{きょう}弟^{だい}の難^{なん}に会^あい、

27 勞^{ろう}し苦し^{くる}み、た^たびた^たび眠^{ねむ}られぬ夜^よを過^すごし、飢^うえ渴^{かつ}き、しばしば食^たべ物^{もの}もな^なく、寒^{さむ}さに凍^{こご}え、裸^{はだか}でいたこともありました。

28 このような外^{そと}から来^くることのほかに、日^ひ々私^{わたし}に押^おしかかるすべ^{きょうかい}の教^{こころ}会^{かい}への心^{こころ}づかひがあります。

すごいですね。これほどまでの苦し^{くる}みにあつたのです。

みなさんは、これほどの苦し^{くる}みにあつたら、どうでしょう。

「もう私^{わたし}はできない」「もうできないから、やめる」と言^いうのではないでしょう。

かみさま 神^{かみ}様^{さま}は、なぜこのよう^{くる}な苦し^{くる}みを受^{あた}えられたのでしょうか。パウロがこのよう^{くる}な苦し^{くる}みを通^{とお}して、な^{こくはく}にを告^{こくはく}白^{はく}したのかを見^みましよう。

① **慰**め^{なぐさ}の神^{かみ}がほめたたえられますように

II コリント 1:3-4a

3 私^{わたし}たちの主^{しゅ}イエス・キリストの父^{ちち}なる神^{かみ}、慈^じ愛^{あい}の父^{ちち}、すべ^{なぐさ}の慰^{かみ}め^{なぐさ}の神^{かみ}がほめたたえられますように。

4 神^{かみ}は、ど^{なぐさ}のよう^{くる}な苦し^{くる}みのときにも、私^{わたし}たちを慰^{なぐさ}めてくださいます。

ここで、「慈^じ愛^{あい}の父^{ちち}、すべ^{なぐさ}の慰^{かみ}め^{なぐさ}の神^{かみ}がほめたたえられますように」とパウロは書^かいています。

みなさん、^{かんが}考えてみてください。

「^{なぐさ}慰め」というのは、^う受けている^{くる}苦しみや^{もんだい}問題よりも^{おお}大きくなければ「^{なぐさ}慰め」にならないでしょう。

たとえば・・・

^{せんせい}先生の^{すえ}末の^{むすこ}息子が、^{じぶん}自分の^{さいふ}さいふの^{なか}中^かに^{かね}お金を^い入れて、^{スーパー}スーパーに^{もの}買い物^いに行きました。⁵⁰⁰500円^{たま}玉¹1つ、¹⁰⁰100円^{たま}玉¹1つ、^{ごうけい}合計⁶⁰⁰600円^いを入れて^いに行きました。^あ歩いて^{行く}行くのに、^{たの}楽しくて、^{さいふ}さいふを^{振り}振り回しながら^いに行きました。^{ところ}ところが、^{さいふ}さいふの^{くち}口^あがあいていたのです。^{振り}振り回していたので、^{かね}お金^いが^と飛んで^い行って、^ななくなって^いしまいました。^{かね}お金^なが^ななくなった^ののが^わ分かって、^{もの}もの^すすごく^お落ち^こ込んで^{かえ}帰ってきました。^{その}その^{息子}息子の^上上の^こ子が、^{なぐさ}慰めて^あげると、^{自分}自分の^も持っている²⁰⁰200円^をを^{わた}渡しました。^{しかし}しかし、^おお金^をを^なくした^こ子は、^ちちっとも^喜喜べないのです。^{なく}なくした^ののは⁶⁰⁰600円^ななのに、^{もら}もらった^ののは²⁰⁰200円^なので。

そのように、^こ子ども^たたちが^失失敗したり、^苦苦しい^とときに、^おお母^{さん}さんが^おおしり^をを^{ポン}ポンと^たたたいて、「^{だい}だいじょうぶ、^{だい}だいじょうぶ」と^い言っても、^{ほん}ほんとうの^{なぐさ}慰め^にには^なりません。^おおき^ここなら、^{ゲーム}ゲームを^ち長時間^ししたり、^{カラ}カラオケ^にに^い行って^お大声^でで^う歌^ったりして、^{スト}ストレス^をを^発発散^するでしょうが、^{その}その^程程度^ででは、^{なぐさ}慰め^にには^ならないでしょう。

パウロが「^{なぐさ}慰め」と^い言うのは、^{その}そのような^{もの}ものではありません。

^{なん}何度も「^{自分}自分の^こ心^の中^でで^死死^をを^覚覚悟^する^ほほどの^苦苦しみに^ああった^のです。^{そこ}そこ^にに^対対する^{なぐさ}慰めは、^どどのような^{もの}もので^しょうか。^ⅡⅡ^ココリント¹1:5^をを^見見て^みましよう。

5 それは、^{わたし}私^たたちに^キキリスト^のの^く苦難^がが^ああふれている^よように、^{なぐさ}慰め^もも^{また}また^キキリスト^にに^よって^ああふれている^かからです。



^く苦しみと^{なぐさ}慰め^のの^は話を^ししていた^{パウ}パウロが、^き急に「^キキリスト^のの^く苦難[」]」について^は話し^はじめます。^キキリスト^のの^く苦難^{とは}、^{イエ}イエス^様様の^じ十字架^とと^死死と^復復活^{につ}について^{です}。^死死を^通通して^死死に^{打ち}打ち^勝勝ち^復復活^さされた^キキリスト[。]それ^にによって、^{えい}永遠^のの^{いの}いの^ちと、^{えい}永遠^のの^神神^のの^国国^のの^希希望^をを^与与えて^くくださった^のので、^{そこ}そこから^感感謝^とと^賛賛美^がが^ああふれた^のです。

② ^ほほかに^{ひと}ひと^{なぐさ}慰め^をを^{つた}伝える

また、^{その}そのような^神神^様様の^{なぐさ}慰め^をを^先先に^味味わっていた^かからこそ、^ほほかに^{ひと}ひと^う受^けている^苦苦しみに^対対しても、^{なぐさ}慰め^をを^{つた}伝える^こことが^でできた^という^ことです。

Ⅱ^ココリント¹1:4b、6-7

4b こうして、^{わたし}私^たちも、^{自分}自分^{自身}自身が^神神^{から}から^受受ける^{なぐさ}慰め^にによって、^どどのような^苦苦しみの^中中^にに^いいる^人人^をも^{なぐさ}慰める^ことが^でできる^のです。

6 もし^{わたし}私^たちが^苦苦しみに^あ会う^{なら}、^{それは}それは^ああなたが^たの^{なぐさ}慰め^とと^救救い^ののため^{です}。^{もし}もし^{わたし}私^たちが^{なぐさ}慰め^をを^受受ける^{なら}、^{それ}それも^ああなたが^たの^{なぐさ}慰め^ののため^で、^{その}その^{なぐさ}慰め^は、^私私^たちが^う受^けている^く苦難^とと^同同じ^く苦難^にに^耐耐え^抜抜く^力力を^ああなたが^たに^与与える^のです。

7 ^私私^たちが^ああなたが^たについて^い抱^いている^の望^みは、^う動く^ことが^あありません。^{なぜ}なぜ^{なら}、^ああなたが^たが^私私^たちと^く苦しみを^とともに^している^ように、^{なぐさ}慰め^をを^とともに^している^ことを、^私私^たちは^知知っている^かからです。

^先先に、^く苦しみを^通通して^神神^様様の^{なぐさ}慰め^をを^う受^けていた^{パウ}パウロは、^ほほかに^{ひと}ひと^く苦しみに^もも^神神^様様の^{なぐさ}慰め^ががある^ことを^確確信^して^いました。

③ 霊的な意味

霊的な意味でも見てみましょう。

救われる前の苦しみと、そのあとの苦しみとは、どのような差があるのでしょうか。

救われる前（未信者状態）の苦しみは、福音を知らないことです。

救いはイエス様が私の人生の主人となることです。しかし、救われる前は、私の人生の主人として私が生きようとするので、生きること自体が苦しみになるしかありません。被造物である私が、神様のように生きようとするので、どれほど苦しいのでしょうか。すべての善悪を判断しようとするのが、どれほど苦しいのでしょうか。生きること自体が苦しみです。



それでは、救われた以降の苦しみはどうでしょうか。同じです。救われても、依然として自分が人生の主体者として生きようとしています。

しかし、違う点は、キリストの霊である聖霊が私の中に入って来られ、限りなく私の自我を消そうとしてくださっているのですが、それが私たちに苦しみとして来るといことです。

みなさん、自分の自我が否定され、それを削られるほど、つらい苦しみはないでしょう。

創世記3章のアダム以降、すべての人たちは、自分が主人で、自分中心に生きようとしています。そのような自分が削除され、否定されることに耐えることができる人はいません。それゆえ、イエス様は「わたしについて来なさい」と言われたとき、「自分を捨て、自分の十字架を負って」ついて来なさいと言われたのでしよう。

ルカ 9:23

イエスは、みなの方に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。

このルカの福音書の内容は、マタイ、マルコの福音書にもありますが、ルカの福音書にだけ「日々」（毎日）ということばがあります。パウロの告白のように、私たちは「毎日」死んで「毎日」生きるべきだということです。

このように「自分を捨て、日々自分の十字架を負い、主について行く」ことについて、次のように書いてあります。

マタイ 11:29

わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。

イエス様がこの地で背負われた「くびき」の最後は「十字架」でした。そこにまことの安らぎがあるのです。ですから、死んでこそ生きるのです。

それを知っていたパウロは、テモテに次のように書きました。

Ⅱテモテ 2:3

キリスト・イエスのりっぱな兵士として、私と苦しみをともにしてください。



また、使徒ヨハネは、黙示録に次のように書いています。

黙示録 1:9

わたしヨハネは、あなたがたの兄弟であり、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐とにあずかっている者であって、神のことばとイエスのあかしとのゆえに、パトモスという島にいた。

ですから、苦しみ（苦難）は、信徒には必ずあるものであって、それは祝福なのです。

IIコリント 1:9-10

9 ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。

10 ところが神は、これほどの大きな死の危険から、私たちを救い出してくださいました。また将来も救い出してくださいます。なおも救い出してくださいという望みを、私たちはこの神に置いているのです。

苦しみを通して私たちは、もっと「神様により頼む」べきです。どんな状況であっても、ただ神様だけに希望を持ちましょう。

2. 祈り

IIコリント 1:11 を見ましょう。

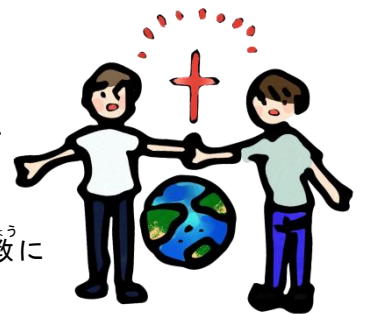
あなたがたも祈りによって、私たちを助けて協力してくださいませ。それは、多くの人々の祈りにより私たちに与えられた恵みについて、多くの人々が感謝をささげるようになるためです。

パウロは、祈りを頼んでいるのと同時に、その理由についても書いています。

①それが伝道者を助けていることです

とりなしの祈りをすることが、ともに伝道と宣教、永遠の救いの働きをしていることです。

私たちが送る宣教師があり、行く宣教師があります。現場を回りながら働きをする人、いる場所で祈って働きをする人がいます。どちらも、同じように伝道と宣教に用いられているのです。



コロサイ 4:3

同時に、私たちのためにも、神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように、祈ってください。この奥義のために、私は牢に入れられています。

伝道の門が開かれるように祈ってくださいと言っています。

②「多くの人々の祈りにより私たちに与えられた恵みについて、多くの人々が感謝をささげるようになるためです。」

多くの人々の祈りによって私が神様から恵みを受け、そのようにして受けた恵みが多くの人々に伝わるので、また、神様に感謝をささげるということです。

パウロと私たちにとって、いちばん大きな恵みはなんでしょうか。もちろん、救われて永遠の天国に入ることは、大きな恵みでしょう。しかし、それは創造の前から予定されていたことです。この地を生きる間は、福音を語ること、伝達することがいちばん大きな恵みでしょう。永遠のいのちに定められた別の人々が、私を通して、主の前に立ち返ること、それこそが、神様の愛であり、隣人への愛です。

初代教会の人々の祈りを見てみましょう。

使徒4:29-31

29 主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。

30 御手を伸ばしていやしを行なわせ、あなたの聖なるしもペイエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行なわせてください。」

31 彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだした。

大胆に神様のみことばを語るために、聖霊の満たしを求め祈りをしたのです。みなさんも、祈るとき、「大胆に神様のみことばを語るため、また、そのために聖霊に満たされるように」と祈りましょう。

最後に聖書1か所を見ましょう。

創世記19:29

こうして、神が低地の町々を滅ぼされたとき、神はアブラハムを覚えておられた。それで、ロトが住んでいた町々を滅ぼされたとき、神はロトをその破壊の中からのがれさせた。

アブラハムは、ソドムとゴモラを滅ぼされるという話を聞いたときに、神様に祈って5回も神様のみこころを動かしました。「その中にいる五十人の正しい者のために、その町をお赦しにはならないのですか。」「四十五人では」「四十人では」「三十人」「二十人」「十人」と、5回神様のみこころを動かしたのです。しかし、結局、正しい者十人がいず、ソドムとゴモラは滅ぼされます。そのように滅ぼされたとき「神はアブラハムを覚えておられた」つまり、アブラハムの祈りを覚えておられたのです。

みなさん、伝道者のために、みなさんの教会の牧師先生のために、宣教師先生のために祈ってください。

みなさんの祈りを覚えて、そこに神様の大きな驚くべき恵みの働きが起こるでしょう。



<祈り>

全能なる神様に感謝します。私たちの苦しみは、問題や呪いではなく、祝福であることを見ました。苦しみを通して神様の慰めをもっと受け、神様にもっとより頼み、神様に希望を持つことを願います。患難の中でも、私たちを生かしてくださったことに感謝して、伝道者のため、現場のためにとりなしの祈りをする中で、この国に、この民族に、多くの所に神の国がもっと臨みますように。イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン